

れる曝露量は少ないと推定されることから、その曝露量を加えても MOE が大きく変化することはないと考えられる。従って、本物質の経口曝露による健康リスクについては、現時点では作業は必要ないと考えられる。

吸入曝露については、無毒性量等が設定できず、健康リスクの判定はできなかった。なお、吸収率を 100% と仮定し、経口曝露の無毒性量等を吸入曝露の無毒性量等に換算すると 0.03 mg/m³ となるが、これと一般環境大気の前最大曝露濃度 0.0019 µg/m³ 未満程度から、参考として動物実験結果より設定された知見であるために 10 で除して算出した MOE は 1,600 超となる。このため、本物質の一般環境大気の吸入曝露による健康リスクの評価に向けて吸入曝露の知見収集等を行う必要性は低いと考えられる。

有害性の知見				曝露評価		MOE		総合的な判定	
曝露経路	リスク評価の指標		動物	影響評価指標 (エンドポイント)	曝露の媒体	予測最大曝露量又は濃度	MOE		
経口	無毒性量等	0.01 mg/kg/day	ラット	尿管の硝子滴、好塩基性変化	飲料水	— µg/kg/day	MOE	—	○
					公共用水域・淡水	<0.000023 µg/kg/day	MOE	>43,000	
吸入	無毒性量等	— mg/m ³	—	—	一般環境大気	<0.0019 µg/m ³	MOE	—	○
					室内空気	— µg/m ³	MOE	—	×

4. 生態リスクの初期評価

急性毒性値は、藻類では緑藻類 *Pseudokirchneriella subcapitata* の生長阻害における 72 時間 EC₅₀ 19 µg/L 超、甲殻類ではオオミジンコ *Daphnia magna* の遊泳阻害における 48 時間 EC₅₀ 8.5 µg/L、魚類ではメダカ *Oryzias latipes* の 96 時間 LC₅₀ 57.7 µg/L が信頼できる知見として得られたためアセスメント係数 100 を適用し、急性毒性値に基づく予測無影響濃度 (PNEC) 0.085 µg/L が得られた。*

慢性毒性値は、藻類では緑藻類 *P. subcapitata* の生長阻害における 72 時間 NOEC 19 µg/L、甲殻類ではオオミジンコ *D. magna* の繁殖阻害における 21 日間 NOEC 7.9 µg/L が信頼できる知見として得られたため、アセスメント係数 100 を適用し、慢性毒性値に基づく PNEC 0.079 µg/L が得られた。

本物質の PNEC は、甲殻類の慢性毒性値から得られた 0.079 µg/L を採用した。

PEC/PNEC 比は淡水域、海水域ともに 0.007 未満となるため、現時点では作業の必要はないと考えられる。

有害性評価 (PNEC の根拠)			アセスメント係数	予測無影響濃度 PNEC (µg/L)	曝露評価		PEC/PNEC 比	総合的な判定
生物種	急性・慢性の別	エンドポイント			水域	予測環境中濃度 PEC (µg/L)		
甲殻類 オオミジンコ	慢性	NOEC 繁殖阻害	100	0.079	淡水	<0.00057	<0.007	○
					海水	<0.00057	<0.007	

5. 結論

結論			判定
健康リスク	経口曝露	現時点では更なる作業の必要性は低い	○
	吸入曝露	現時点では更なる作業の必要性は低い	○
生態リスク	現時点では更なる作業の必要性は低い。		○

[リスクの判定] ○: 現時点では更なる作業の必要性は低い、▲: 更なる関連情報の収集に努める必要がある、(▲): 既存の関連情報を総合的に勘案して判断すると更なる関連情報の収集に努める必要がある、■: 詳細な評価を行う候補、(■): 既存の関連情報を総合的に勘案して判断すると詳細な評価を行う候補、×: 現時点ではリスクの判定はできない。